

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | | |
|------|---|---|---|
| 報告番号 | ※ | 第 | 号 |
|------|---|---|---|

氏 名 島田善規

論文題目 交通まちづくりにおける認識の同型性の構築に関する
研究－長久手地域におけるリニモ問題を事例として－

A Study of Constructing Social-cognitive Isomorphism in
Transport-based Community Development－Focusing on the
Linimo Issue in Nagakute Area－

論文審査担当者

主 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教授 竹内恒夫
副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教授 高橋 誠
副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教授 丸山康司
副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教授 加藤博和
副 査 名古屋大学大学院環境学研究科 准教授 涌田幸宏

論文審査の結果の要旨

持続可能な交通政策が目指されているなか、交通に関連するまちづくりの現場では、交通事業の計画段階のみならず、その評価段階においても、論争の状態が生じており、これを改善する手法が求められている。本論文は、リニモ問題を事例にして、各主体間の問題認識や意見の差異、ズレを共有化する、つまり、認識の同型性を構築していくことによって、論争の状態が改善されるのではないかと仮説の下に、「意見を相対化する」、「出来事を並べる」、そして「聞きあう討論」の3つの方法によって、これを検証するとともに、これら意見の差異の共有化の手法を政策・事業の評価段階に取り入れるよう提言したものである。

第1章では、研究の背景、目的などを明らかにした。背景の中で、「リニモ問題」とは、リニアモーターカーによる愛知高速交通東部丘陵線という交通手段が既に完成し、運行されているが、それが地域にとってプラスの存在なのか、マイナスなのかなどについて、人々の評価に食い違いが生じた現象であるとした。第2章では、交通まちづくり論、コミュニティデザイン、熟議デモクラシーなどリニモ問題の改善策を分析しうる各種の手法などを批判的にレビューし、本研究における手法を提示した。第3章では、沿線の交通計画と現況、地域開発計画と現況、市民の参加・活動などの交通まちづくり論の視点からの分析を行い、第4章では、客観的と思われる「事実」と、人々の「解釈」とを対照し、専門家（本研究では筆者）が構築する「意見を相対化する」手法を試みた。第3章及び第4章によって、事実から解釈を見ることと、解釈から事実を見ることと双方向の循環的な対照によって相対化した認識の同型性の構築の手法が得られた。第5章では、①交通計画、②交通システム開発、③地域の変化、④万博、⑤鉄道経営、⑥市民参加、それぞれの出来事を時系列的に年表にして、変化の相互作用を読み取る「出来事を並べる」手法を試みた。これによって、論争の状態を改善するために必要なマクロな見方ができるようになった。第6章では、人々が意見の差異を共有し、再構築するプロセスとして、筆者がかかわった「リニモとことん語る会」での討論を通じて「聞きあう討論」手法を試み、論争の状態が改善され、差異が共有されることを例証した。第7章では、政策・事業の評価段階の市民参加に、意見の差異の共有化手法を取り入れることなどを政策提言した。

本論文は、リニモ問題というかなり特異的な事例を対象としていること、全体的に筆者独特の概念やレトリックが多用されていることなどの課題があるものの、政策・事業の評価段階での市民参加のプロセスに、これまで着目されてこなかった意見の差異の共有化という手法を試みたという点で、環境政策論の学術的発展に寄与するものである。

よって、本論文提出者島田善規氏は、博士（環境学）の学位を授与される資格がある。

論文審査担当者

| | | | |
|----|----------------|-----|------|
| 主査 | 名古屋大学大学院環境学研究科 | 教授 | 竹内恒夫 |
| 副査 | 名古屋大学大学院環境学研究科 | 教授 | 高橋 誠 |
| 副査 | 名古屋大学大学院環境学研究科 | 教授 | 丸山康司 |
| 副査 | 名古屋大学大学院環境学研究科 | 教授 | 加藤博和 |
| 副査 | 名古屋大学大学院環境学研究科 | 准教授 | 涌田幸宏 |